

2009年3月31日 第32号



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：日本手の外科学会
広報委員会

第52回学術集会の 開催にあたって

第52回日本手の外科学会学術集会
会長 堀内 行雄
(川崎市立川崎病院 副院長)

目 次

- 第52回学術集会の開催に当たって
- 2008年度JSSH-ASSH Traveling Fellow 報告記
- ハンドギャラリー (児島コレクション)
- 委員会報告
- 第15回春期教育研修会
- お知らせ
- 編集後記



第52回日本手の外科学会学術集会を平成21年4月16日(木)・17日(金)の2日間、東京新宿で開催させていただきますことは、慶大上肢班にとって大変光栄なことと思っております。慶大では過去3回、本会を開催しましたが、今回は第33回矢部 裕名誉教授の主催から19年ぶりになります。

平成18年度から日手会認定手の外科専門医制度が始まり、今回の学術集会終了後に第1回専門医認定試験が行われます。そこで、本学術集会のスローガンを「専門医制度の確立一更なる技術の修得に向けて」とし、専門医制度に関するシンポジウム、アンケート、専門医のための特別講座などを企画しました。

そのほかにも多くの会員が興味を持っていただけるようないくつかの企画をしました。ひとりでも多くの会員の皆様のご参加をお待ちしております。

【学会場と事前登録】

学術集会はすべて東京新宿の京王プラザホテル内で行います。発表会場7つと企業展示会場を使用します。また、参加受付や単位申請講演の選択などでの窓口の混乱を避けるため、ホームページを使用して事前に参加登録、単位申請講演の受講申し込みをしていただくことにしました。会員の先生方におかれましては、この趣旨をご理解いただきホームページを通じて事前登録をお願いします。本ニュースからの時間がないため、少々期間の延長も考えておりますので、期限が過ぎていても事前登録をチャレンジしてみてください。

【プログラム】

招待講演は、スウェーデンLundborg教授、スペインGarcia-Elias教授、米国Berger教授とPeimer先生、韓国Baek教授、フランスDumontier先生の6人の先生にそれぞれ得意な分野の講演をしていただきます。シンポジウムは「末梢神経再生の基礎と臨床応用」、「日手会専門医制度の現状と未来」、「手関節尺側部痛に対する診断と治療」、「手の先天異常：母指の機能障害とその再建」と「手根管症候群重症例に対する母指対立機能再建術の必要性とその工夫」の5テーマを企画し、パネルは「手の外科領域の骨軟骨欠損に対する対策」、「CRPSの病態と治療」、「末梢神経砂時計くびれの病態と治療」

と「橈骨遠位端骨折—各種プレートの適応と限界—」の4テーマを企画しました。また、特別企画として独自で画期的な手術法や治療法を考案した12名の日手会会員の先生方をお願いして特別講座を組みました。さらに、ディベートとして橈骨遠位端骨折治療における「創外固定 vs プレート固定」を企画しました。トラベリングフェローの2口演は一般演題の中で口演してもらいます。演題募集は過去最高の512題の応募をいただき、75名のプログラム委員にお願いし、厳正に審査していただきました。ご多忙の中、審査していただいたプログラム委員の先生方にはこの場を借りましてお礼申し上げます。すべての演題を採用しなかったのですが、プログラム編成の関係上、一部不採用にせざるを得ませんでした。まことに申し訳ありません。昨年同様にe-posterを使用しますが、演者には3分間の口演もしてもらうようにし、通常のポスターは廃止しました。

ランチョン、イブニング、モーニングの各セミナーも多くの興味ある演題を取り揃え、食事も用意しますので、是非、ご参加願います。

【関連集会】

本学術集会関連の集会として、例年通り、日手会第15回春期教育研修会(18日)、第48回手の先天異常懇話会(16日昼)、第32回末梢神経を語る会(17日夕)、第21回日本ハンドセラピ学会学術集会(18日)が開催されます。

新しい多くの企画を準備いたしました。平行で進行する演題も多く、すべての演題を聞いていただけないのが残念です。招待講演、シンポ、パネル、特別講座、ディベート、各セミナーに加え、口演やe-posterにも興味ある演題が多数あります。発表される会員は勿論のこと、できるだけ多くの演題を聞き、討論に参加していただきたいと考えています。是非、本学術集会に参加され、学会を盛り立てていただくとともに多くのものをお持ち帰りになり、明日への診療や研究に生かしていただくことを祈念いたします。

JSSH-ASSH Travelling Fellow 報告記

大阪大学整形外科

村瀬 剛

この度、2008年度JSSH-ASSH Travelling Fellowとして、米国の5つの代表的な手の外科施設を訪問する貴重な機会を与えていただきました。大変有意義な経験を持つ事が出来たので、ご報告させていただきます。

最初に訪問したのはMichigan大学のDr. Kevin Chungです。彼は手の外科医として忙しく過ごす傍ら、橈骨遠位端骨折やリウマチ手に関する優れた臨床研究が評価されてMichigan大学のベストリサーチャーに選出されています。見学して驚いたのは、彼自身が臨床研究を効率よく進めるために構築した非常に合理的なシステムです。Physician Assistantと呼ばれる助手が術後患者の処置だけでなく手際よく臨床評価を入力し、別の助手が写真撮影して画像を整理、オフィスではそれぞれの臨床研究プロジェクトに専属の秘書数人が必要なデータを管理する、といった具合です。彼自身はスタンディーデザイナーや、手術適応の決定、実際の手術など、外科医として重要な部分にのみ関わり、良く教育されたスタッフが他の部分を担当する、という見事な分業体制を敷かれています。エビデンスの高い臨床研究がどんどん生み出されている現場は、大変参考になりました。

次に訪れたMayo Clinicでは、Dr. Alexander Shin, Dr. Spinnerの手術を見学。腕神経叢の神経移植とRiordan法の合併手術を2人が立ち替わり手術。当日は残念ながらチームリーダーのDr. Bishopがお休みでしたが、この3人からなる腕神経叢チームが互いに切磋琢磨しながら貪欲に新しいチャレンジをしている姿が印象的でした。一方、筑波大学から留学中の吉井先生にお願いしてラボのツアーもさせていただきました。若い留学生とラフな姿の実験助手たちのいる実験現場は、どちらかという

ハイソなクリニックと対照的に、非常にアットホームな感じでした。留学生たちが何人か集まると、我々トラベリングフェローを囲んで即興のカンファレンスが始まり、そこへProf. Anが加わりました。好きずきな意見を交わしながらの有意義な時間。夜は、韓国から留学中で旧知のDr. In-Hoの主催で、たまたまMayoを訪問中のソウル大学Prof. Baek一行を交えてのパーティーとなり、思わぬ日韓交流も果たしました。

その次のNYではまず、Hospital for Special Surgeryを訪問しました。Dr. WeilandのCM形成術やDr. Athanasianの手の腫瘍の手術などを見学。Dr. WeilandはAAOSやASSHの会長を歴任し、教育者としても何度も表彰されているアメリカ手の外科学会の功労者です。一見頑固親父風ですが、話すと気さくに答えてくれます。手術場でのメス裁きは鋭く、手術をしながら彼自身が昔JBJSに載せたCM関節の論文の話をしてくれました。外来ではDr. Hotchkissに付かせていただいて、肘のOAや陳旧性外傷のX線写真を見ながらディスカッション。残念ながらホストのDr. Wolfeは奥様が急病とのことで不在でしたが、非常に貴重な経験をさせていただきました。NYでのもう一つの訪問先はColumbia大学。チーフのDr. Rosenwasserがヤンキース松井選手の執刀医であること以外、正直あまり予備知識はありませんでしたが、ここを選んだのは大正解。大学のある地域はいわゆるハーレム、ほとんどスペイン語の世界です。No.2のDr. Strauchの外来では貧しい移民たちが一杯。彼はスペイン語で患者に話しかけ、医療費を気かけながら治療を選択していきます。今まで見てきたアメリカの施設とは全く違った様子に、医療の原点を再確認した気分でした。一方、翌日訪れたDr. RosenwasserのオフィスはNYのダウントOWNのど真ん中。ここで外来診察の合間中、CM関節症やSL離解に関する新しい治療のプロジェクトなどに関してディスカッション。そして、当日偶然にリハビリで来院中の松井選手を紹介していただく幸運に預かりました。大スターなのにとっても謙虚な人柄に、阪神ファンながら感激いたしました。また、同大学留学中の上羽先生（元京都大学医療短大教授 上羽康夫先生のご子息）にはラボの見学など、大変お世話になりました。紙面を借りてお礼申し上げます。

最後に訪問したのはボストンのMassachusetts総合病院。忙しい大病院で私たちの相手をする時間がないのでは？と心配していましたが、全くの杞憂。Dr. Jupiterは出張中で不在でしたが、ホストのDr. Mudgal, Dr. Ringはじめ手の外科のチームはとてもフレンドリーな人たちでした。カンファレンスでも、「日本ではどうなの？」といつも我々の意見を求めてくれたり、夜はアメリカ最古のレストランでスタッフ総出の歓迎会を行ってくれたり。日本に帰ってからは、Dr. Jupiterから「君たちのプレゼンにみんな感心していたよ」とねぎらいのメールまでいただきました。

米国留学の経験のない私にとって、今回の知り得たアメリカ手の外科の実際や優れた外科医たちとの交流はかけがえのない物となりました。手の外科医としての私の今後の礎とするとともに、アメリカと日本の手の外科の交流に少しでもお役に立てればと願っております。

最後になりますが、トラベリングフェロー選考の際にお世話になった当時の国際委員会担当理事の水関先生、委員長の金谷先生、訪問に際して多くの有益なアドバイスを頂いた現在の担当理事の別府先生、委員長の堀井先生、そして長い旅の間、抜群の英語力と積極性で時にはサポートし、時にはリードしてくれたパートナーの洪 淑貴先生に心よりお礼申し上げます。



松井選手を囲んで



左から筆者、Dr. Ring、洪先生

2008年度 JSSH-ASSH Traveling Fellowとして Michigan Hand Center, Mayo Clinic, Hospital for Special Surgery, Columbia University, Massachusetts General Hospital の5カ所を訪問して参りましたのでご報告いたします。

まず9月18日から3日間 Chicago で開かれた ASSH Annual Meeting に参加し、今回から新たに始まった試みである“Traveling fellow luncheon”で6分間の presentation をしました。誰もが名前と顔を知る ASSH の『巨人』たちの前で発表をするのは大変光栄なことではありましたが、ただただ緊張するばかりでした。糖尿病患者のバネ指の特徴についての発表をさせていただきましたが、熱心に聞いていただき、また質疑応答でも色々質問をしていただき、良い経験になりました。

今回訪問した施設のうち Mayo, HSS, MGH の3カ所は非常に有名で、訪問された方も多い上、村瀬先生の報告記に我々の経験がぎゅっと凝縮されて述べられていますので、私は Michigan Hand Center, Columbia University での経験について印象を追記することにします。

1) Michigan Hand Center (Dr. Kevin Chung)

Chicago からレンタカーで約6時間、典型的なアメリカ中西部の大学町、Ann Arbor にある Michigan University の形成外科教授である Dr. Kevin Chung がほぼ一人で resident 達を率いて診療しています。副学部長も勤めるお忙しい中、到着翌日の朝の walking tour から最後の banquet まで、休憩時間を含めて訪問前から全日程のスケジュールを立ててくださって、迎える車にはオーディオから日本の歌が流れているという細やかな心遣いには感激しました。Staff surgeon が一人でも、有能な Physician's assistant とアメリカで最も激しい競争を勝ち抜いてきた Plastic surgery の resident 達を教育し、research supporting staff を教育することで、無駄のない高いレベルの医療と臨床研究を実践していると感じました。ここでも presentation の機会を与えていただき、名古屋大学で治療した280例以上のキーンバック病症例の治療成績、現在の我々の治療方針について30分にわたって講演させていただきました。

2) Columbia University (Dr. Rosenwasser と Dr. Strauch)

Columbia University のあるあたりはヒスパニック系住民が多い庶民的なエリアで、住民の多くは英語が十分に話せません。ここでは Dr. Strauch の予約なしの外来と予約外来、それから Dr. Rosenwasser の予約外来、と主に外来を見学しました。予約の有無(=貧富の差)にかかわらず丁寧に患者を診察する Dr. Strauch は、時に保険のない患者がいるとその人にとってベストの選択を考えて指示(=教会の運営する無料の病院へ紹介状を書く、保険の手続きを手伝ってくれるソーシャルワーカーを紹介する、など)し、簡単な会話はスペイン語で、複雑な話は電話通訳サービスを駆使して患者が納得するまで説明する、非常に誠実な方でした。また Dr. Rosenwasser のオフィスは高級店の並ぶ5番街に近く、ヤンキース松井秀喜選手の手術をした高名な先生と緊張して出向くと、ご本人はとても気さくでユーモアのある方でした。たまたま1階のロビーでリハビリに来ていた松井選手を見かけたことを興奮して報告すると、さりげなく彼のリハ終了時間をチェックしてその頃にリハビリ室に連れて行ってくれ、引き合わせてくれるという粋な心遣いをしていただきました。また、舟状月状骨離解に対する独自の手術法(RASL法)や手根骨の acute ulnar translation の治療法について discussion でき、知的好奇心もミーハー心も充足される大変楽しい時間を過ごしました。

字数の関係でここに詳細を書けなかった施設も、質の高い医療・研究を行っている施設の共通点は合理的であるということです。アメリカは日本以上に医師の件費が高い国ですので、医師は医師以外では出来ない仕事に専念し、周りのスタッフはそれを支えるという体制がしっかり出来ています。日本もこういった合理化を進める必要を痛感しました。

また、出発する前はもちろん、旅が始まってからも不安がいっぱいでしたが、振り返ってみると米国だけでなく、ヨーロッパ、アジア各国の先生方とも知り合えて、草の根レベルの国際交流が出来たという実感がありました。

最後になりましたが、このような機会を与えていただきました理事長、国際委員会担当理事・国際委員会の先生方、そして良き先輩であり楽しい旅の道連れ、村瀬 剛先生に紙面をお借りして心より御礼申し上げます。



左から、村瀬先生、Dr. Kevin Chung、筆者

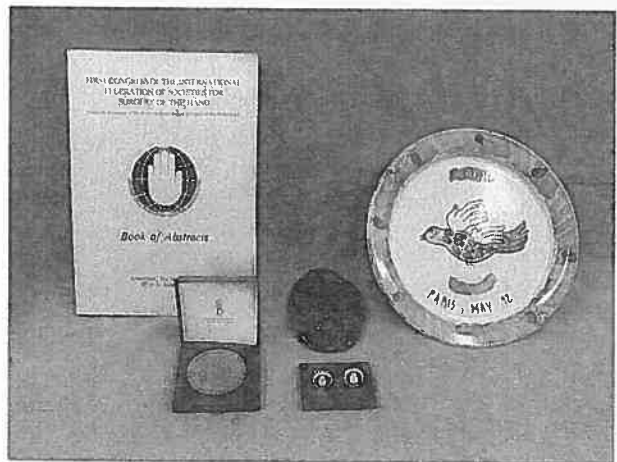
ハンドギャラリー(児島コレクション) X

埼玉成恵会病院・埼玉手の外科研究所
児島忠雄

手の外科学会記念品 その1

国際手の外科学会の記念品をご紹介します。

第1回国際手の外科学会は1980年6月17日から5日間、オランダのロッテルダム市・エラスムス大学でBernhard皇太子の後援のもとに開催されました。Buck-Gramcko, Eaton, Iselin, Kessler, Kleinert, McFarlane, O'Brien, Osborne, Swanson, Verdant先生など、世界中から著名な手の外科医が参加し、それぞれ得意とする分野の講演をされました。演題総数は243題、日本からの出題は29題(12%)で、故田島教授、津下教授も講演されました。(写真の左側が抄録集、その前方が記念のメダルです)。以後、国際手の外科学会は3年毎に開催されています。第2回は米国ボストンでしたが私は参加できませんでした。第3回は1986年11月3日から8日間、田島達也会長のもと、東京の京王プラザホテルで盛会裡に行われました(写真中央の前方が記念品のカフスポタンです)。第4回はイスラエルで開催されましたが、中東の政情不安定、会場がエルサレムから急遽テルアビブに変更されたためもあり、参加者は少なく、寂しい学会でした(写真中央の後方がアフリカ中東地方で魔除けを意味するガラス製の記念品で、手掌に目が描かれています)。写真右側は1992年のパリで開催された第5回の記念品、鳩のつばさとなった手が羽ばたいている皿絵です。1992年以降、私が参加した国際学会やドイツ語圏手の外科学会、記念品のブロンズ像も併せて展示されています。



各種委員会報告

教育研修委員会

委員長 鈴木 康

教育研修委員会は、昨年4月より担当理事が別府諸兄先生から矢島弘嗣先生に交代となり、西川真史先生と中尾悦宏先生が委員を退かれて、新たに山本謙吾先生および清水弘之先生にご参加いただきました。別府先生、西川先生、中尾先生、長い間ご苦労様でした。根本孝一先生・酒井直隆先生・磯貝典孝先生・高原政利先生・稲垣克記先生、および私（鈴木）の6名は、前年度より委員会活動を継続しています。

当委員会の主要業務は、年2回の教育研修会開催と、教育研修用DVDの作成です。教育研修会の企画では、講師と題目の選択に毎回知恵を絞っていますが、現在は一昨年に発足しました専門医制度の必須研修項目に合わせるように心掛けています。また、例年4月の学術集会翌日に開催されます春期教育研修会は advanced course と位置付け、ベテランの先生方にもご参加いただけますような講演内容を目指し、学会の先端的話題も取り入れて行きたいと考えております。一方、秋期研修会は基本的に basic course であり、専門医を目指す若い先生方の勉強に役立つような演題構成としております。特に、“手の外科”の基本的な診察法・解剖・手術の基本手技などに関しましては、毎回経験の豊富な先生方にご講演を御願いするようにしていますので、皆様方のご施設の若い先生方、関連施設やご開業の先生方にも、整形外科・形成外科の専門領域を超えて、多数参加していただきたいと思っています。

教育研修用DVDの作成は、著作権問題が絡み、なかなか作業が捗りません。会員の皆様にはご不便をお掛け致し申し訳ありませんが、もう暫くお待ちいただきたく存じます。

近年、ハンドセラピストの多くの方は本学会の教育研修会受講を希望されていますし、去年は日本ハンドセラピィ学会からの本研修会への参加の要望も出されました。当委員会としましては、参加を認める立場を採っています。これに関しましては、皆様方の忌憚のないご意見をお聞かせいただきたく存じます。

最後になりましたが、“教育研修会”の一般的形態としては“研修講演”および“受講者の理解度の評価”の二者が必要とされます。現在の本教育研修会では、受講者に講演内容をどの程度理解していただけたのかを確認する方式が確立していません。講演終了後の自己採点式確認テストの採用を考えたこともありましたが、専門医試験の問題作成様式との関連から、この方式は却下されました。今後も受講されます先生方に講演内容を十分ご理解いただくための制度・体制作りを進めて行きたいと考えています。

編集委員会

委員長 池田和夫

委員会のメンバーは尼子 雅敏、岩崎 倫政、岡島誠一郎、長田 伝重、瀧川宗一郎です。編集委員会は、学会誌である日本手の外科学会雑誌の刊行を職務として活動してきました。しかし、2008年より新担当理事に名古屋大学手の外科の平田 仁教授が就任してから、編集委員会の活動内容が少々変わってきました。今まで通りに、ただ査読していれば良い時代ではなくなってきたのです。それは、平田理事就任時に示された、発刊の遅れの解消と財務状況の改善の二本柱です。そのために、今までの編集システムの大がかりな変更を考えるようになりました。これは、広報委員会との緊密な連絡の

下に、ホームページの改変にリンクして、オンライン投稿システムを構築することです。第52回の日本手の外科学会の発表論文の投稿に間に合わせるべく、準備を行っています。このシステムが稼働することにより、4部もコピーして用意していた論文は、ホームページから電子情報を送るだけで済みます。査読委員や投稿者に郵送していたやりとりも、すべて電子化で済みます。大きな省力化と経費節減につながるものと期待しています。また、このシステムになれば投稿規程も変更されますので、その折にはオンライン投稿システムの手順に準拠してご投稿をお願いすることになります。

1. 編集進行状況報告

第51回日本手の外科学会学術集会（つくば）の発表演題373題中、投稿されたのは185編（50%）でした。これに加えて、5編の自由投稿論文を加え、190編の査読を行いました。ちなみに、第22巻（2005）は182編で924頁、第23巻（2006）は208編で1112頁でした。

2. 紙面のレイアウトなどについて

4ページで17,000円の投稿料を徴収しており、1ページ超過で7000円の追加料金をとっている。しかるに、1ページ目のレイアウトでは、所属と名前だけで終わってしまっている。そこで、1ページ目に論文内容が十分はいるようなレイアウトに改める。英文抄録は200語にまで短縮したが、英文の抄録自体が査読の妨げにもなり、またアイデアを外国読者に持っていかれるとの懸念もあり、また二重投稿の誹りを受ける原因のひとつにもなっている。そこで、英文抄録を廃止し、和文抄録（400語）とする。せっかくHand Surgeryという英文雑誌を持っているのであるから、英文投稿はHand Surgery (Asian Volume)に投稿を勧める。ことを、提案しています。

3. 査読システム（オンライン化）について

現在の雑誌刊行の遅れを是正するためには、是非とも査読のオンライン化を進めたい、ということが委員会全体の総意であり、強く推し進めているところです。

機能評価委員会

委員長 面川庄平

機能評価委員会は平成20年に3名の委員が交代し、現在、金谷文則理事のもと、今枝敏彦、澤泉卓哉、五谷寛之、百瀬敏充、森友寿夫と面川庄平の6名の委員で構成されております。平成20年度の委員会は4回開催され、以下の活動を行っています。

- ①手関節に関する部位特異型の患者立脚型評価として国際的に汎用されているPRWE(Patient Rated Wrist Evaluation)の日手会版を作成し、計量心理学的評価を完了しました(担当:今枝委員)。第52回日手会で発表したのちにJ Orthop Sciに投稿予定しています。
- ②尺側手関節痛患者における日手会版PRWEの反応性検証のため、データを集積中です。これに関連した作業として、手関節尺側痛の日手会評価基準(試案)が完成し、妥当性検証が進行中です(担当:面川委員)。
- ③切断指再接着後評価の日手会評価基準の妥当性検証のため、データを集積中です。再接着肢、手、指における日手会評価基準とChen、玉井の評価基準の比較、相関の検討をおこなっています(担当:五谷委員)。

今後の予定として、平成22年度末をめどに手の機能評価表の改訂作業を行う予定です。具体的な作業内容として、①先天異常委員会と共同で先天異常の項目の改訂、②ハンドセラピスト学会と協力して、手に関連した客観的評価法の表記、改訂、③妥当性が証明されている患者立脚型評価と汎用されている評価法を整理して表記することがあげられます。

今後、QOL評価である患者立脚型機能評価の重要性が益々高まると考えられます。一方、医療者

による従来型の機能評価は日常診療で汎用されていますが、それらの多くは妥当性、信頼性検証のなされていないのが現状です。機能評価委員会は、今後より有用な評価法をバランスよく手の機能評価表に表記していけるように活動を継続していく予定です。

用語委員会

委員長 小林 明正

平成20年度の利用語委員会のメンバーは約半数が交代しました。河井秀夫が新たに担当理事になられ、前委員長の岡 義範はアドバイザーに、委員は池田全良と新たに加わった黒島永嗣、坪川直人の両委員および小林の6人の構成となりました。岡 義範前委員長の下で、平成19年4月に改訂第3版日手会用語集が発行されました。このため今年度は、第4版用語集発行に向けての改訂作業の基本事項の確認と、手順などを決定することが主活動で委員会が2回（5月札幌、9月東京）開催されました。第4版の発行時期は平成24年4月を目指しての作業のタイムスケジュールの作成、および日整会、日形会など関連学会用語集との整合性をとることが確認されました。第2版作業時に、浜田良機元委員長のご尽力で全ての語句がExcelに転載されました。第3版の改定作業は、Excel化された第2版の用語を全評議員に分担し検討してもらいました。この結果を、2ヵ月毎に開催された委員会で十分に検討しましたが、完璧なものではありませんでした。また、第3版のCD化も検討も併行して検討しましたが結論を得ず、冊子でのみの発刊に至りました。

第4版の改定作業は、第3版と同様、和語・欧語とも全語句を対象にして前版の見直し作業を基本としました。冊子形式で発刊された第3版用語集のオリジナルは、Excel形式で記入され保存されているため、第4版ではExcel表を利用して、訂正を要する用語の修正、新たに収載を要する語句などの検討を行うことにしました。全評議員にExcel形式になっている第3版用語集のオリジナルを送付して、分担部分を検討していただくことになりました。また、名誉・特別会員の先生方には第4版の発刊に際し、ご意見を伺うことにしました。第3版は冊子形式のみでしたが、第4版ではCD化実行に向け検討していきます。CD化するとしたらどの程度の機能を有する形態にするか、利便性、費用の件など今後の検討課題かと思います。

国際委員会

委員長 堀井 恵美子

平成20年度の国際委員会は、別府担当理事、阿部アドバイザーの下、池上、五谷、砂川、松下、村瀬の5名の委員と、委員長の堀井計8名で構成しております。

1. Traveling fellow の選出

国際委員会では、各traveling fellowの選出を行い理事会に推薦しています。

a) JSSH-ASSH traveling fellow

村田景一氏、射場浩介氏の2名をJSSH-ASSH traveling fellowとして推薦しました。平成21年のASSHに出席していただく予定です。ASSH Bunnell traveling fellowとして、Mayo clinicのDr. Steven Lawrence Moranが、12月に来日されました。

b) Japan Hand fellow

今年度は韓国のDr. Hyun Sik Gongを選出しました。Japan Hand Fellowの選考にあたり、当初の日手会の趣旨が選考に反映されにくいことから、招待する手の外科学会（対象国）を決めて、できるだけ、多くの国の若手手の外科医を受け入れることができるように、募集要項を変更することを検討しております。また、Hand Surgeryに訪問記を寄稿していただくよう依頼することにしました。

c) JSSH-HKSSH exchange traveling fellow

今年度は恵木 丈氏を選出しました。応募者の業績評価に関して、手の外科関連の業績をより重視したいと考え、その旨募集要項に明記するようにします。香港手の外科学会の開催日の決定が遅いため、応募期間が短くなってしまうことから、次年度以降は、3月の日手会ニュースで募集を行うようにしていきます。香港からはLam Man Yan Marianne氏が日手会に合わせて来日されます。

2. IFSSH 2010 ポストコンGRESS・第5回日米合同手の外科会議

平成22年に東京で開催予定の国際学会に関して活動を始めました。名称について、以下の通り決定しました。

第11回国際手の外科学会連合東京会議 (The Post Congress of the 11th International Federation of Societies for Surgery of the Hand conjunction with the 5th Combined Meeting of the Japanese and American Societies for Surgery of the Hand), 略称 International Hand Symposium in Tokyo, 2010 (IHS, Tokyo 2010)

第63回 ASSH meeting in Chicago の会場にてパンフレットを配布しました。平成21年度より活動を本格化する予定です。

3. Journal of Hand Surgery, European volume 購読について

出版社からの申し入れで、日手会会員に対して、一定の購読部数があれば、特別の discount が受けられることとなりました。委員会として討議を重ねた結果、会員の利益となることと判断し、初回のみ、雑誌社から送られてきたパンフレットを日手会誌とともに全員に配布しました。

4. Corresponding Member, Honorary Member の推薦

Dr. Jörg Grünert が新 Corresponding Member として推挙されました。推薦用紙をホームページに掲載して、年3回の委員会および理事会での審議を要することを明記のうえ、常時推薦が可能であるようにしていく予定です。

Honorary Member への推薦に関しては、厳密に5年ごとの貢献を確認していく予定です。

5. 日手会各委員会の英語名称に関して

以前より懸案であった先天異常委員会は Congenital Anomaly Committee とすることを確認しました。さらに、学術研究プロジェクト委員会 Scientific Research Project Committee, ガイドライン策定委員会 Guideline Planning Committee の名称に関しても決定しました。

6. ホームページ英語版について

日手会 web の英語表記を多くして、①日手会の組織・歴史などの紹介をする、②外国からのアクセスをスムーズに、また質問に答えられるよう Mail Address を明記する、③IFSSH や APFSSH など、connection ができるようにする、など提言されました。今後、広報委員会との合同作業を行っていく予定です。

広報委員会

委員長 副島 修

平成20年度の広報委員会は、田中寿一担当理事、堀内行雄アドバイザー、副島 修、佐藤和毅、藤岡宏幸に加え、新たに今谷潤也、小野浩史、白井久也が委員となり、3回の委員会を開催し活動を行いました。

まず例年通り年二回の日手会ニュース (第31号、第32号) の発行に加え、三浪新理事長の就任に伴い号外を発行しました。また、第81回日本整形外科学会の特別ポスター展示として、「日本手の外科学会50年の歩みと次世代への飛翔」と題したポスターを作成し展示しました。このポスターの作成に当たっては、理事長制への移行・事務局移転に関する記載漏れが後日判明し、関係諸先生方にご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。第82回日整会では、「手の外科の最近の話題—第52

回手の外科学会より」と題してポスター展示を行う予定です。

さて、現在の広報委員会での最大の仕事は、会員専用ホームページの立ち上げと機能拡張を行うことです。日整会オンライン会員管理システムとの連携を図りながら、いかに効率よく、かつ経済的にシステムの拡充を図っていくか検討を行っています。手始めとして、各委員会へアンケート調査を行い、ホームページ上での追加機能を選定したいと思っております。会員の先生方も、希望される機能などありましたら、是非委員会までお知らせください。

日手会パンフレットは、25. 合指症、26. 母指多指症が理事会での最終校正の段階で、現在27. TFCC損傷の校正作業に取りかかっています。今年度中にはすべて発行したいと思っております。パンフレットDVD第二部の作成は、予算の関係もあり作業を見合わせているところですが、予算がおり次第作成に着手する体制をとっております。また、今年度の新たな事業として、手の外科専門医のバッジを作成します。デザインは田島達也先生原作のタイピンのデザインを流用する案で進行中です。ご期待ください。

以上多くの案件を抱えています。委員一同奮迅して活動していることをご報告いたします。

社会保険等委員会

委員長 牧野正晴

本委員会は佐々木担当理事、立花アドバイザー、牧野委員長以下計10名で構成されています。

外科系学会社会保険委員会連合（外保連）の各委員会活動への参加、学術集会時のランチョンセミナー開催、日本整形外科学会（日整会）との合同作業（ICD-11関連の活動、整形外科関連学会の保険収載要望申請の取りまとめ等）、厚生労働省への保険改定陳情、および聞き取り調査への参加等が恒常的な活動であり、委員会定例会議、および委員間のmail交換により事項の検討、情報共有を行っています。また、社会保険等と等の文字が現すように保険関連と考えられる問題が生じると、直に問い合わせが来ます。数年前の運動器リハビリテーション問題、今年度では上肢静脈内麻酔の問題（局所麻酔薬は保険適応でないため、麻酔の申請は適応を変更しない限りできないと佐々木先生から回答していただきました）、あるいは屈筋腱のリハビリが認められなくなるとの話が聞こえているが本当か調べるように等がありました（どうも事実ではないようでした）。その都度情報収集を行い対応しています。まさに日手会情報部とでも言えるような活動が要求されることがあります。

昨年度発足しました日整会手術調査委員会の活動、今年4月に我が国で予定されているICD改定に関する筋骨格系TAG（局長？）対面会議、外保連活動の新たな作業（4000以上の外保連試案術式のコーディングを行い、医療機器・器具の網羅を図る）、これら全てが日手会と無関係ではありません。情報化社会の進行は早まるばかりのようです。我々としては、日整会、外保連の活動に積極的に参加して情報収集、整理、解析を行うべきだと考えています。ただ、日手会は整形外科医だけで構成されてはいません。形成外科の先生方との協調を図り、日手会独自の活動も展開する必要があることは言うまでもありません。

先天異常委員会

委員長 川端秀彦

今年度のメンバーは、光嶋勲担当理事、高山真一郎アドバイザー、川端秀彦委員長、荻野利彦委員、石田治委員、香月憲一委員、射場浩介委員の7名で構成されています。先天異常委員会の活動には先天異常懇話会の開催、手の先天異常の症例登録、評価基準の作成、先天異常で用いられる用語の統一などがあります。私たちは活動を通して先天異常手を有する患者さんが等しく高い水準の治療を受

けられるような社会を作っていきたいと考えています。

【先天異常懇話会開催】手の先天異常懇話会は、例年日本手の外科学会総会の会期中に症例検討会として開催しております。本年度も堀内会長にご配慮を頂いて学会初日昼の時間帯でプログラムに取り入れていただきました。全国の施設から持ち寄っていただいた、診断や治療に難渋している症例を多数の専門医の間で検討し、検討結果を持ち帰って日常業務に役立ててもらおうことがひとつの目的です。さらに日頃この種の疾患を目にする機会が少ない先生方の勉強にもなるような会を目指しています。日本手の外科学会専門医制度の研修単位認定も受けておりますので、当日はたくさんのご参加をお願いいたします。詳しくは日手会のホームページやこの日手会ニュースのお知らせをご参照ください。

【手の先天異常の症例登録】前高山真一郎委員長の精力的な活動のお陰で裂手症関連症例の症例登録を開始することが出来ました。個人情報保護の観点からは日本手の外科学会の倫理委員会の承認を受けており、先生方の病院で個々に再度倫理委員会に諮る必要はないとの見解を専門家の方から頂いております。詳細内容につきましてはすでに書面にてご連絡差し上げておりますが、各施設を受診された患者さんを5年前までさかのぼり登録いただきたいと思います。疑問点がございましたらお近くの先天異常委員会委員にお問い合わせください。ご多忙とは存じ上げますが、すべての日手会評議員の先生方に本研究の研究協力者としてご協力いただけますよう、よろしく願いいたします。

【評価基準の作成】射場委員を中心にFDTを用いた母指形成不全症の評価の multi center study 開始に向けての試行を開始いたしました。いずれその結果を会員の先生方にもお示ししたいと思っております。小児の手の総合的機能評価は従来から決定的な方法がなく、客観的で汎用性のある機能評価方法を作成する方向で今後も研究を推し進める予定です。また、完成しました母指多指症・合指症術後の評価基準も国内外の学会で使用されつつあり、今後も国際的にも認められるような評価法に育てていただきたいと思っております。

【先天異常関連用語の整理】手の先天異常の分類については一応の結論が出ていますが、さらに先天異常委員会の分類で用いる用語と手の外科用語集との整合性を用語委員会と協力して図っていきたくと考えております。

【その他】日常診療で比較的良好に遭遇する先天異常手疾患についての“患者向けパンフレット”として多指症と合指症のふたつのパンフレットが広報委員会のご協力の下に完成しており、近いうちに先生方のお手元で利用していただけるようになる予定です。

今後とも諸先生方のご支援・ご指導を宜しくお願い申し上げます。

倫理委員会

委員長 渡 邊 健太郎

当委員会は、①同種移植に際しての倫理的問題、②会員の不祥事あるいは犯罪に対する対応、③患者のプライバシーの保護、④事務局に保管されている会員個人情報の管理、を目的として平成16年から活動しており、平成18年度からは理事会からの指示を受け本学会への入会希望者の審査も行っています。また、平成20年度より本学会学術研究プロジェクト委員会が発足しましたが、応募により審査を通過した研究テーマに対する倫理的側面の審査も新たに当委員会の仕事となりました。

平成20年度は担当理事が浜田理事より越智理事に交代され、委員長も梁瀬委員長から小生に交代となりました。また新たに奥山訓子、重富充則、山我美香、深谷和子各氏が新委員に加わり8名に増員となりました。再生医療や遺伝子医療の進歩に伴い、医師主導型臨床試験を実施するにあたり改正GCPの遵守が厳しく求められるようになり、当委員会も臨床医のみでは十分な検討や対応が困難になることが予想され、臨床試験の現場に詳しい外部委員にも参加していただいています。

平成20年度は8月19日に予め学術研究プロジェクト委員会を通過した4件の研究テーマについて審査・検討いたしました。いずれも本学会にふさわしいテーマでしたが、患者の個人データの保守管

理方法が詳記されていないケースがありました。とくに研究者間でデータを共有化や移動する際の媒体の管理手順について明記が必須ですので今後応募される会員は周知していただきたいと思います。また、学術研究におけるインフォームド・コンセントに関する書類について今後は事務局で保管することとしました。

ガイドライン策定委員会

委員長 澤 泉 卓 哉

ガイドライン策定委員会は2007年度から新設され、まだ2年目の新しい委員会です。現在橈骨遠位端骨折診療ガイドライン策定に向け鋭意作業を継続しているところですが、現在おこなっている作業内容、今後の展望を報告させていただくとともに多々重なった不手際につきまして謝罪させていただきます。

大まかな診療ガイドライン策定の手順は、1) 最初に医師・患者のニーズに見合ったリサーチクエスチョンの設定、2) そのクエスチョンに対する文献の収集、3) 査読する文献の抽出、4) 査読・構造化抄録の作成、5) 査読された文献のエビデンスレベル分類・推奨の決定、6) 最後が公開となります。現在、査読する文献の抽出まで終了しております。各方面の先生からのご批判とご指導をいただきながら数度の委員会を経て2008年10月までに58のリサーチクエスチョンの作製と、そのクエスチョンに関する文献のなかから必要と考えられた文献の抽出・選択をおこないました。何分橈骨遠位端骨折は多の疾患に比べまして著しく文献の数が膨大で、その中から選考の末に抽出されたのは1800編ほどになってしまいました。この次の作業は構造化抄録の作製作業になります。金谷理事他10名の委員のみでは構造化抄録作製は不可能と考え、日手会評議員に分担して作製していただく旨を委員会で話し合いましたが、評議員、理事の諸先生に十分な理解が得られないまま作業を進行してまい、評議員の諸先生には多大なご迷惑をおかけすることになってしまいました。当初委員会としましては2008年中に構造化抄録の回収作業を終える予定で10月に評議員にネットを通じて依頼させていただきましたが、ご理解と賛同を得られないままに作業に入ってしまったことと、作業の繁雑さから、予想外の回収率となってしまう、再度2009年2月まで締め切りを延期することとしました。198名の評議員に依頼しました構造化抄録の回収率は、3月9日の時点で57%、抄録数にしまして550件ほどがまだ未回収のままとなっております。最終的な未回収分は委員が分担して作製することを委員会で申し合わせてはおりますが、現在の数では委員に負担が大きすぎ戸惑っているところです。4月に開催されます日手会総会の評議員会で改めましてこれまでの経緯を説明させていただきますとともに評議員各位にはご理解とご協力をお願いする所存です。近年橈骨遠位端骨折に対する治療法は変化が早く、数年のうちに治療の本流が変わってしまいます。委員会としまして、up-to-dateな内容にするために3年以内の完成を目指しているところです。何卒ご指導・ご鞭撻とともにご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

学術研究プロジェクト委員会

委員長 藤 哲

昨年平成20年度よりスタートしました『学術研究プロジェクト』について報告します。平成20年度は、応募のあった8件に対して学術研究プロジェクト委員会の審議を経て倫理委員会・理事会での承認を得、以下の4件を採択しました。なお、助成金援助はこのうち2件を対象としました。残りの2件は、企業他からの助成金が得られるプロジェクトであり、日手会がその研究を指導・後援するものです。

- 1 ネットワーク環境に対応したデジタル化上肢機能評価システムの構築
栗本 秀 (名古屋大学手の外科) 助成金 601,360 円
- 2 観血的手術を行った舟状偽関節・遷延癒合に対する低出力超音波パルスの治療効果に関する研究
光安 廣倫 (九州大学大学院整形外科)
- 3 橈骨遠位端骨折に対する掌側ロックングプレート固定：人工骨補填の有無による治療成績の多施設無作為化比較試験
長田 伝重 (獨協科大学整形外科)
- 4 橈骨遠位端変形治癒骨折に対し術前切削加工した人工骨を用いたコンピュータ支援3次元矯正骨切り術の臨床成績
米田 昌弘 (大阪市立総合医療センター整形外科) 助成金 398,640 円

このプロジェクトの目的は、学会が主導し（多施設にわたる）、より高いエビデンスが得られる（前向き研究）臨床研究を施行し、日本手の外科学会の発展に寄与するということです。テーマ決定の方法としては、会員に対してのテーマの公募を行い、学術研究プロジェクト委員会で決定し、理事会の承認を受けます。また学術研究プロジェクト委員会が独自に企画して行う場合もあります。研究期間は、原則として3年以内とし、エビデンスレベルの高い研究内容が対象となります。

研究成果は、日手会学術集会での発表および日手会誌または *Hand Surgery* への投稿を義務付けられます。資金調達・援助に関しては、スポンサーがあることが望ましいが、小規模の研究に対しては日手会として支金援助を行います（50～100万円程度）。

本年度の公募は既にホームページを通じて2月から始まり、4月30日締め切りとなり、本年度の7月の理事会で承認される予定です。

学会員の皆さんからの、多くの応募をお願いいたします。

担当理事：麻生 邦一 委員長：藤 哲
委 員：落合 直之、浜田 良機、平田 仁、別府 諸兄

法人化検討委員会

委員長 土 井 一 輝

平成20年度日本手の外科学会（日手会）総会にて、日手会の法人化について検討するため、日手会法人化委員会が設置されました。平成20年度は3回の委員会を開催し、その都度、委員会の協議事項を理事会に報告してきました。以下、その経過を簡単にご報告します。

1. 日手会の法人化とは：

個人が日本人としての権利を主張するためには、住民登録することが基本条件です。同じように、団体が、その権利を社会に認めてもらうためには、法人として登録する必要があります。現在の日手会は法人ではありませんので、権利なき任意団体であり、固定資産などの所有権はありません。専門医制度との関係で言えば、厚生労働省が認定する専門医としては認められません。つまり、現在の日手会専門医は仲良しクラブ内だけで通用する存在であり、社会的に認定された制度ではないという事です。専門医制度だけでなく、日手会が日本において、手の外科学の研究、普及など国民に貢献するためには法人化は不可欠です。

2. 法人化のメリット

- 1) 日本医学会分科会、日本専門医認定協議会機構、厚生労働省が認定する広告のできる専門医制度に申請を行い、認定されれば、社会的に認知された日手会専門医制度となります。
- 2) 日手会自体の社会的認知度が高まります。法人化しない学術団体は仲良しクラブに過ぎませんが、法人化することにより学術団体として認知されます。

- 3) 日手会として業務契約，登記ができます。現在の日手会は登記ができず，業務取引において信用力はありますが，法人化することにより社会的信用が増し，今後の活動が容易になります。
- 4) 事業委託・補助金を受けやすくなります。行政からの委託事業や補助金は対象を法人に限定しており，現在より委託・補助が受けやすくなります。
- 5) 税制上優遇処置が受けられます。収益事業は課税されますが，公的目的事業は非課税となります。

3. 法人化のデメリット

- 1) 事業目的，事業内容を見直し，より公益性を高めることが求められます。将来的に公益性の高い公益社団法人を目指す場合には，特にこの問題の対応が必要です。
- 2) 事務処理が煩雑になります。会計報告を含めた年次事業報告並びに予算を含めた事業計画を所定の期間内に監督官庁に提出することが求められます。
- 3) 定款の改正が必要です。当面の目的である一般社団法人でも，指導監督基準に適合するよう会則を変更する必要があります。また，代議員制度の整備も必要です。
- 4) 法人化すれば，会費の納入義務は法的なものとなり，滞納は許されません。しかし，一方では会費納入が円滑になり，収支バランスを整えやすくなる。
- 5) 事業活動規模にもよりますが，事務局の体制を現状よりは強化することが必要になり，事務経費がある程度増加すると考えられます。

4. 法人化への当面の問題点

- 1) 一般社団法人として登記するための基準に合致した定款の改正が必要です。
- 2) 一般社団法人でも会員総会が議決機関になります。会員総数の2分の1以上の総会への出席は不可能ですので，総会に代わる議決機関として代議員制度が必要になります。

5. 法人化へのロードマップ

法人化検討委員会は，理事会から法人化した場合のメリット，デメリットの提示及び，定款の草案を作成することを依頼されています。草案は既に作成し，専門税理士の意見を入れた修正案を平成20年度評議員会に提示します。当評議員会で協議を行い，第52回日手会学術総会に法人化のメリット，デメリットについて提示します。総会で承認されれば，平成21年度総会での定款改正の採択の後に，法人化申請を行います。また，より公益性が高く，税制面でも有利な公益社団法人化に向けて検討を進めてまいります。

資格認定委員会

委員長 中島英親

事業報告

資格認定委員会のメンバーは，担当理事が矢島弘嗣，委員として石川淳一，澤泉卓哉，西源三郎，牧野正晴，正富 隆，村上恒二，中島英親です。仕事としては，①受験資格の書類審査および合否判定，②専門医の更新認定，③特例措置による専門医申請審査です。

平成20年11月16日に開催した第1回委員会では，1) 第3回専門医特例申請の審査および2) 第1回専門医試験申請に向けての検討を行いました。

- 1) 特例措置による申請は今回が最後の審査となりました。全部で109名（北海道:10名，東北地区:7名，関東地区:37名，中部地区:17名，近畿地区:17名，中四国地区:14名，九州地区:14名）の応募があり，申請書類を審査した結果，論文数の不足していた3名を除く106名が合格し，専門医数は619名となりました。
- 2) 第1回専門医試験申請に向けては，以下のことを検討しました。
 - ①研修履歴について。申請様式2の研修履歴には，最低5年間の手の外科に関する研修がわかるように記載すること，その記載された施設の研修証明書が必要であることを確認しました。

②海外の研修について、海外での研修を認めるかどうかは、どういう形での留学かによるため、ケースバイケースで判断することとしました。

③専門医の署名について、専門医のいない施設での手術も一定数まで認められることにより、その場合の病歴要約における専門医の署名は、施設長の署名をもって代えることを確認しました。平成21年2月1日に開催した第2回委員会では、1) 第1回専門医試験受験申請書の審査、2) 第1回専門医試験への対応の検討、3) 第2回専門医試験申請に向けての検討を行いました。

1) 第1回専門医試験受験申請書の審査では、初めての専門医試験であり受験者数がかমেませんでした。40名（北海道：1名、東北：2名、関東：12名、中部：7名、近畿：12名、中四国：5名、九州：1名）の申請がありました。このうち申請時に5年経過していない2名をのぞき、書類審査は合格としました。

今回の申請書類の不備の中で、症例の報告に問題が散見されたことより、次回からデュピュイトラン拘縮、肘部管症候群などの症例で症例報告のためのモデルを作り、書き方の見本とすることとしました。

なお、学術集会参加については、平成22年度試験に限り、第48回学術集会（過去5年間は第48回、49回、50回、51回、52回が対象となる）の参加を証明できるものがあれば、これを認めることになりました（第2回理事会決定）。

感想

資格認定委員会は、特例申請が20年9月30日で終了しましたので、11月16日に第3回専門医特例申請の審査を行い、専門医数は619名になりホッとしました。しかし、すぐに第1回の専門医試験受験申請者の審査が、平成21年2月1日にあり、申請者の症例報告などに不備が見られましたが、できるだけ試験が受けられるようにはかりました。これから毎年約40名の申請者があると思われます。また今度からは4月に試験があり大変です。まだまだゆっくり出来ません。委員の皆様のご協力が無事終わりました。最後に事務局の皆様にお世話になりました。

施設認定委員会

委員長 奥津 一郎

平成20年度第一回日本手の外科学会理事会（平成20年7月27日）および第二回理事会（平成20年12月23日）において、日本手の外科学会専門医制度認定研修施設として基幹12施設と関連4施設の合計16施設が追加認定されました。

その結果、平成21年2月末日現在、手の外科研修施設として認定されている施設は、基幹研修施設223施設、関連研修施設61施設の合計284施設となりました。

この認定研修施設の数は、平成20年2月末日の基幹研修施設198施設、関連研修施設57施設の合計255施設に比べて、1年間で29施設増加したことになります。

手の外科研修施設の増加は、将来手の外科専門医を目指す医師が出来るだけ負担がない形で実のある研修を受けることが出来るようにとの手の外科専門医の配慮と努力の表れとも評価できるものと考えます。

また、申請に際して専門医の在職期間の誤認、書類上の不備も減少してきており、認定研修施設とは、いかなるものなのかについても理解が進んできたようです。

手の外科研修施設は3年間認定されますが、専門医の異動等に伴い、認定条件を満たさなくなった場合の事務局への連絡がまだ徹底されていないようですので、該当施設は速やかに事務局に連絡するようお願いいたします。

認定研修施設の一覧は、現時点では日手会のホームページに掲載されていませんが、早急に掲載予定です。

専門医試験委員会

委員長 和田卓郎

事業報告

専門医試験委員会は現在、加藤博之理事、落合直之、水関隆也両アドバイザー、石田 治、佐藤和毅、鈴木克侍、田中英城、平瀬雄一、和田卓郎の6人の委員で第1回専門医試験実施に向け活動を行っています。2005年度に専門医試験委員会が発足してからの活動を要約すると次のようになります。

1. 第1回専門医試験の概要を決定
2. 各評議員に4題の問題作成を依頼。
3. 評議員作成問題のブラッシュアップによる筆答試験問題の作成。
4. 口頭試験問題の作成
5. 第1回専門医試験の実施

活動の大半は、評議員の皆様にご作成していただいた合計739題の問題をブラッシュアップして筆答問題を完成させる作業に費やしました。手の外科の基本的な知識を問うこと、設問・解答には根拠となるevidenceがあること、1つの問題文には2つの要素を含まない、など様々な要件を満たすよう考慮しながら作業を進めました。こうしてプールした問題をさらにブラッシュアップして、実際の筆答試験問題としました。一度作成した問題も、見直すと何かしらの疑義が見つかるもので、問題作成の難しさを身にしみて感じました。

第1回専門医試験は、日手会学術集会翌日の4月18日に筆頭試験と口答試験が行われます。筆答試験は50題です。口答試験の試験官は専門医試験委員に加え、理事の先生にもお願いしました。受験者の提出問題と委員会が用意した問題について質問します。採点は当日に行いますが、一定期間疑義を受けつけ、不適切問題があれば削除するなどの対応をします。合否判定は資格認定医委員会で行い、理事会の承認を得て5月中旬に合格者が発表される予定です。

委員会発足時には、委員はみな手探り状態でした。何とか試験実施まで漕ぎ着けたというのが本音で、至らない点があるのも事実です。当初予定していたQ&A作成ができなかったのもそのひとつです。受験者に試験の具体的な方向性を示すことができず、申し訳なく思っています。試験終了後には試験に関するアンケートを行う予定です。ぜひご意見をお寄せください。また、日手会の会員にもご批判をいただきたいと思っております。今後何年かかけて、手の外科専門医試験のシステムを完成できればと思っています。

手の外科専門医試験が日本における手の外科診療の質の向上、手の外科の国民への認知、につながることを願ってやみません。

教育研修カリキュラム委員会

委員長 田嶋 光

本委員会は平成19年1月から教育研修講演申請の受付を開始し、本年5月分申請分まで計19回の認定審査を行っています。2年を経過し申請上の問題点も改善が見られていますが、未だ特徴的な誤りがあり再審査を行っています。

1. 申請演題の分野選択の誤りが見られること。これには内容が分野と合致していないこと、演題名からは内容が不明で委員会として判断が困難なことおよび現在のカリキュラムからはどれを選択してよいか迷うことにあります。
2. 多数項目の分野選択が多いこと。これは今後の資格取得、更新条件の改定で必須項目の取得が義務化されると1分野に限る必要があります。

3. 肘関節部外傷，障害に関する申請演題が多く，現在の研修カリキュラム内容に当てはまらず対応しきれないことです。
4. 講師資格は細則第5条で，明記されていますが，他分野の医師，医師以外の講師については，適宜委員会判断で決定していきます。

以上の点は，申請者が留意する点と現行の研修カリキュラムが手の外科の現状に対応していない点があり，委員会で再検討してきた以下の変更，新設を理事会に提起しています。

- ①カリキュラム4 骨折・脱臼・靭帯損傷の7) 肘関節内の骨折，脱臼，靭帯損傷を7) 肘関節周辺の骨折，脱臼，靭帯損傷”に変更し，(8) 上腕骨顆上骨折，(9) 上腕骨遠位骨端離開”として追加新設する。
- ②カリキュラム9 関節変性疾患に，9) スポーツ肘障害 (1) 上腕骨小頭離断性骨軟骨炎，(2) 肘関節内側側副靭帯障害として追加新設する。
- ③カリキュラム10 炎症性疾患の2) 非化膿性炎症の(2) 腱炎・腱周囲炎・腱付着部炎に，c. 上腕骨内側，外側上顆炎を追加新設する。
- ④カリキュラム15 マイクロサージャリーの内容を，“四肢のマイクロサージャリー”として特化する。
- ⑤カリキュラム13 手関節疾患を 9 関節変性疾患に取り込み統合させる。具体的には，9 関節変性疾患8)の次に，9) スポーツ肘障害 (1) 上腕骨小頭離断性骨軟骨炎，(2) 肘関節内側側副靭帯障害，10) Kienböck病，11) Preiser病，12) 遠位橈尺関節障害，13) 三角線維軟骨複合体病変，14) 尺骨突き上げ症候群とする。

以上，これまでの教育研修講演申請上の問題点と現行のカリキュラム内容の改変につき述べていますが，会員の留意と十分な検討に付されることを期待しています。

2007年度 IFSSH 代表者会議報告

阿 部 宗 昭

2008年度のInternational Federation of Societies for Surgery of the Hand (IFSSH) Delegates' Council Meetingsは，2008年6月19日，スイスのローザンヌで第12回欧州手の外科学会（Federation of the European Societies for Surgery of the Hand）の会期中に開催された。私は参加の予定で準備をしていたが，直前に体調をくずして出席が困難になったため，広島の水関隆也先生がローザンヌへ行かれることを知っていたこともあり，急遽，先生をお願いして参加していただいた。昨年7月の20年度第1回理事会には水関先生からいただいたメモをもとに報告したが，その後，secretary generalのMichael Tonkinから詳細な議事録が届いたので会議の概略を報告する。なお，この代表者会議の議事録はIFSSHのHP（日手会のHPからもアクセスできる）の中にあるDelegates' Council Meetingを開くと読むことが出来るので，より詳細を知りたい会員はHPをみていただきたい。

2007年3月（Sydney）から理事が交代となり，Executive Committee Memberは以下のようになった。

President :	James Urbaniak (USA)
President-Erect :	Ulrich Mennen (South Africa)
Secretary General / Treasurer :	Michael Tonkin (Austraria)
Immediate Past President :	Arlindo G Pardini, Jr (Brazil) 欠席
Secretary General Erect :	Zsolt Szabo (Hungary)
Historian :	William Coony (USA) 欠席

参加は26ヵ国の代表者と今回新しく加盟が認められたBangladeshの代表者，および国際ハンドセラピイ学会IFSHTの理事長，副理事長がGuestsとした参加した。

*** President Report (Urbanik) :**

IFSSH 設立当初の委員会は6つであったが、40年後の現在は50に増えている。しかし、必ずしも全ての委員会が機能しているとは言えないので目標をしぼって活動し、活動結果を報告して欲しいことが強調された。

もう一つは加盟国の手の外科学会の紹介する本(Hand Surgery—Worldwide—International Reconstruction of a Beautiful and Ready Instrument of the Mind)を作り韓国での11回国際学会で発行したいことを述べられた。

*** Secretary General's Report (Tonkin) :**

• 第10回 シドニー学会 (2007) 報告

登録者 1846 名 (surgeons : 870, trainee surgeons : 178, therapist : 513, accompanying persons : 285), 国際ハンドセラピィ学会を同時開催。

• 第11回 ソウル学会 (2010年10月31日~11月4日)

この会では国際ハンドセラピィ学会の同時開催は予定されていない。

• 第12回 学会 (インド, ニューデリー, 2013年3月4日~8日)

Tonkin は国際学会開催国の決定に際して、開催候補国のセラピィ学会が国際ハンドセラピィ学会を同時に開催できるかどうかとも考慮に入れる必要があるのではと述べている。

• Website (<http://www.ifssh.org>) :

IFSSH のホームページはインドの Raja Sabapathy らのお陰で充実したものになってきた。(冒頭で記したように日手会のホームページからアクセスできる)

• Historian :

2002年からHistorianであったCooneyが辞意を表明したので、Nominating Committeeで候補者を検討している。

*** 会計報告**

収入 : 91,929.99 ドル

支出 : 11,732.99 ドル

Total balance : 683,553.00 ドル ('07年度は 632,159.73 ドル)。年々5000ドル前後のプラスの決算で健全財政であるが、年会費を支払わない国がある。このため、3年続けて滞納している国は代表者会議で投票出来ないようにしようとの動議が出され、満場一致で可決された。

*** 南アメリカの加盟国からの提案**

1. 2016年の第13回学会をBuenos Airesで開催したいと提案した

(南アメリカは過去に2回立候補し、韓国、インドに敗れている)。

2. South American Federation は Argentina, Brazil, Chile, Colombia, Uruguay, Venezuela の6カ国が加盟しており、2年に1回 Federation Meeting を開いている。加盟国のメンバーはIFSSHの学会に参加したいが財政的に参加できないメンバーが多いので、参加費などを安くして欲しいこと、さらにIFSSHの年会費も低所得の国は減免して欲しいと提案した。これに関する討論で、低開発国からの参加者に対する考慮が必要であるとの意見も多かったが、結論は次回のポーランド(ポツナン)での代表者会議に持ち越された。

*** 開催国決定に関して**

開催国は今までも地域性を考慮して決定されてきたが、ヨーロッパ、アジア太平洋、北アメリカ、南アメリカの地域を考慮に入れたうえで代表者会議での投票で決定することが確認された。さらに、絶対的条件ではないが国際ハンドセラピィ学会を併催できることも考慮されるべきことが確認された。

*** Pioneers in Hand Surgery**

3年ごとの国際学会でPioneers in Hand Surgeryが表彰されるが、推薦できる人がいる場合はTonkinに連絡すること。

***Swanson Lecture**

シドニーの学会から設けられ、第1回はLundborgが推薦された。ソウルでの候補者の推薦はExecutive Committeeで決められる予定。講演者には5000ドルの謝金がある。

***次回の代表者会議**

2009年6月、Poland PoznanでFESSH meetingの会期中に開催される。

会議の概要は以上であるが、代理出席をしていただき、報告までいただいた水関隆也先生に感謝します。

日本手の外科学会 第15回春期教育研修会

会 期：平成21年4月18日(土)

場 所：東京医科大学病院 本館6階臨床講堂
東京都新宿区西新宿 6-7-1

参加費：5,000円

※受講単位が不要な場合でも、参加費の納入は必要です。

取得単位：下記単位が取得できます。

日本整形外科学会専門医 1演題1単位

日本手の外科学会手の外科専門医 完全受講2単位

受 付：4月16・17日 学術集會事務局受付で参加受付のみいたします
4月18日 研修會会場前にて単位とともに受付いたします

8:30～ 受付開始

- ① 9:00～10:00 手の外科における血管柄付き骨移植術
矢島 弘嗣 先生 (奈良県立医科大学整形外科)
- ② 10:10～11:10 手・肘の人工関節
稲垣 克記 先生 (昭和大学横浜市北部病院整形外科)
- ③ 11:20～12:20 肘関節鏡
高原 政利 先生 (山形大学整形外科)
- 12:20～13:00 セミナー
- 13:00～13:40 昼食
- ④ 13:40～14:40 腱移行術 ～その適応と実際～
木森 研治 先生 (土谷総合病院整形外科)
- ⑤ 14:40～15:40 TFCC損傷—その臨床と実際—
藤尾 圭司 先生 (関西電力病院整形外科)
- ⑥ 15:50～16:50 リウマチ手・手関節の画像診断と治療
清水 弘之 先生 (聖マリアンナ医科大学整形外科)

共 催：日本手の外科学会・アステラス製薬株式会社

〈〈〈〈〈〈〈〈お知らせ〉〉〉〉〉〉〉

専門医試験について

第1回の専門医試験は、以下の通り行われます。

日 時：平成21年4月18日(土) (第52回学会の翌日) 8:30~12:30

場 所：東京都・京王プラザホテル

形 式：筆答試験および口答試験

次回、専門医試験は平成22年4月の予定です。申請要項については、夏頃公示の予定です。

学術研究プロジェクトについて

第2回学術研究プロジェクトの公募を行っております。

期 間：平成21年2月1日~4月30日

募集要項：詳細は、日手会ホームページをご参照ください。

編集後記

桜の美しい時期が過ぎ、各病院ではフレッシュマンの先生方のご活躍のことと思います。堀内行雄会長が第52回日本手の外科学会学術集会を開催され、引き続いて第15回春期教育研修会、第1回手の外科専門医試験が東京の京王プラザで行われます。いよいよ本格的に日手会専門医制度が開始されます。卒後臨床研修制度や医師不足など医師を取り巻く社会環境は著しく変化していますが、日本手の外科学会がより発展するようにホームページの充実など広報委員会もこれまで以上の努力をしていく所存ですので、会員の皆様方の一層のご支援を宜しくお願いいたします。(文責：藤岡 宏幸)

広報委員会

(担当理事：田中寿一 アドバイザー：堀内行雄 委員長：副島 修 委員：今谷潤也、小野浩史、佐藤和毅、白井久也、藤岡宏幸)